銭形平次捕物控

十萬兩の行方

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、飯田町の上總屋が死んださうですね」

ガラツ八の八五郎は、またニユースを一つ嗅ぎ出して來ました。江戸の町々がすつかり青葉に綴られて、時鳥と初鰹が江戸ツ子の詩情と味覺をそゝる頃のことです。

「上總屋が死んだところで俺の知つたことぢやないよ」

錢形平次は丹精甲斐もない朝顏の苗を鉢に上げて、八五郎の話には身が入りさうもありません。

「ところが、聞き捨てにならないことがあるんですよ、親分」

「上總屋の死に樣が怪しいとでも言ふのか」

「二年も前から癰を患つて居たつていふから、人手にかゝつて死んだとすれば、町内の外科が下手人見たいなもので――」

「落し話を聽いちや居ない、――何が聞き捨てにならないんだ」

平次は漸く朝顏から注意を外らせました。

「金ですよ、親分。上總屋音次郎が、鬼と言はれ乍ら、一代にどれほどの金を拵へたと思ひます？」

ガラツ八はなか〳〵の話術家です。平次が滅多な事件に手を染めないのを知つて、かう乘出さずには居られないやうに持ちかけるのでした。

「五六萬兩かな、――有るやうでないのは何んとかだと言ふから、精々三萬兩ぐらゐのところかな」

「さう思ふでせう。ね、親分」

「イヤにニヤニヤするぢやないか、それとも十萬兩もあつたといふのかい。こちとらから見れば十萬兩は夢のやうな大金だが、上總屋なら」

平次はガラツ八に焦らされると知つて、忌々しくも煙草入を拔いて一服つけました。

「尤もこちとらに十萬兩もあつた日にや、あつしは早速十手捕繩と緣を切つて――」

ガラツ八の話は、また妙なところへ飛躍して行きます。

「金貸にでもなつて懷手で暮すつもりだらうが、さうは問屋が卸さないよ」

「そんなサモしい根性ぢやありませんよ。先づ山ノ手の百姓地を五六萬坪買つて――」

「大きく出やがつたな、人參牛蒡でも作る氣になつたか」

「大違ひ、――親分に植木屋を始めて貰つて、あつしはそれを江戸の緣日へ持出して賣る」

「馬鹿だなア」

平次は仕樣ことなしに苦笑をしました。そんな氣でゐる八五郎の心根が哀れでもあつたのです。

「ね、親分。冗談は冗談として、上總屋の話だが、――誰でも一應は萬と纏まつた金があるに違ひないと思ふでせう」

「それがどうした」

「死んで了つた後で、番頭や親類の者が、熊鷹眼で捜したが、不思議ことにあるものは借金ばかり。何萬とある筈の金が、たつた十兩もないと聽いたら驚くでせう」

「驚くよ、――お前の義理でも驚かなくちや惡からう、それからどうした」

「たつたそれだけだが、ちよいと變ぢやありませんか親分。神田から番町へかけて、並ぶ者のないと言はれた上總屋音次郎が、死んで一文もないなんざ、皮肉過ぎますよ」

「捜しやうが惡かつたんだらう」

「そんな筈はありません。床下から天井裏まで捜したんださうで」

「それとも主人が死ぬと一緒に、誰か持出した奴があるのかな」

「熊鷹の眼が二三十見張つてゐる中から、巾着一つ持ち出せるものぢやありません。まして千兩箱を五十も百も」

「よし、判つた。八五郎に揚足を取られるやうぢや世話アねエ」

平次は苦笑ひをしました。

「そこで一つ、親分にお願ひがあるんだが」

「何んだい」

「上總屋の番頭さんに逢つて下さいよ」
「？」
「亡くなつた主人は、何處かに金を隱してあるに違げえねえが、何人かゝつても見付かりさうもない。金が出なかつた日にや、後の恰好がつかないさうです」
「で？」
「番頭さん、構はないから入つて來てくれ。お前さんから、親分に話して見るが宜い」
ガラツ八は入口の方を振り向いて、大きな聲を出しました。
「それぢや、御免下さい」
靜かに格子を開けて入つたのは、二十三四のまだ若い男でした。地味な風をして居りますが、一寸良い男で何處か笑顏に人をそらさないところがあります。
「お前さんは？」
狹い家、初夏の風が吹き拔くやうに開けつ放してあるので、平次は坐つたまゝで、客の物腰がよく見えます。
「上總屋の手代で、仙之助と申します。八五郎親分にお願ひして、主人の隱した金を見付けて頂かうと思ひましたが、八五郎親分は、錢形の親分さんにお願ひした方が宜いと仰しやるので、先刻から門口を拜借して、お待ちして居りました」
若い番頭はそれだけの事を言ふうちにも、すつかり恐れ入つて、立て續けにお辭儀をして居

ります。

「寶捜(たからさが)しは困るよ、番頭さん」

「ヘエ――」

「上總屋の案内を知つた者が、幾日かゝつても解らないといふのに俺が行つたところで解るわけはない。そいつは岡つ引より易者(えきしや)へ行く方が早いぜ」

平次は寶捜しにまでコキ使はれる馬鹿々々しさが我慢がならなかつたのです。

「でも、それぢやお嬢さんが可哀想で御座います」

「お嬢さんが？」

「上總屋に金があればこそ、親類も知合もあの通り肩を入れてくれますが、何んにもないと判つたら、どうなることで御座いませう。それに折角纏(まとま)りかけた縁談も、お氣の毒なことに駄目になります」

「縁談？」

「お嬢さんのお染(そめ)さんは、たつた一人娘で、この秋には御武家方から御養子が入らつしやる筈でございました」

仙之助の心配するのは尤(もつと)もでした。主人が死んだ上、金が一文もないと判つては、武家の次男坊がわざ〳〵町人へ養子に來る筈もありません。

「そいつは氣の毒だが、どうも俺は寶捜しに乘出すわけには行かねエ。いづれ分別人の上總屋

のことだから、何處か容易に見付からないところへ隱してあるんだらう。お互に拔け驅けの功名をする氣にならずに、多勢で手を分けて探して見るが宜い。五十も百もある千兩箱を、懷へも袂へも隱せるわけはないから」

平次はそれつきり緣側へ出てしまひました。十萬兩の寶捜しよりも、朝顏の苗の方が大事だつたのです。

二

「親分、だから言はねエこつちやねエ」

ガラツ八の八五郎が飛込んで來たのはその翌る朝。

「何んだつて腹を立てて居るんだ。俺は文句なんか言はれる覺えはないぜ、八」

平次は機嫌の好い寢起の顏を狹い庭から持つて來ました。

「親分が御輿をあげないから、到頭人死がありましたぜ」

「誰が死んだんだ」

「上總屋の甥の重三郎ですよ。その死にやうが大變なんで、行つて見て下さいよ、親分」

「よしツ、それぢや出かけよう」

「まご〳〵して居ると、市ヶ谷の富藏親分が、誰彼の見境もなく縛つてしまひますよ」

「縛りたきや縛らせて置くが宜い」

さう言ひ乍らも、事件が思ひの外の重大性を持つて居さうなのが平次の岡つ引本能を鼓舞します。

飯田橋中坂下の大地主、上總屋に驅け付けた時は、家の中はまだゴツタ返して居りました。

「お、錢形の」

一番早く見付けたのは、山の手で顏を賣つた御用聞、市ヶ谷の富藏です。中年者の強かな顏には、さり氣ないうちに敵意が燃えて、出來ることなら平次を一歩も中へは入れ度くない樣子でした。

「市ヶ谷の親分、何にか大變なことがあつたんだつてね」

「まア、見てくれ、白鼠が枡落しに掛つたやうなものさ、死んだ上總屋の主人も、飛んだ人が惡いよ」

富藏はそれでも案內顏に先に立つてくれます。

家の中をザツと見て、平次も胸を惡くしました。よくも斯う滅茶々々に叩きこはしたと思ふほど何も彼も原形を留めません。床も天井も引剝したまゝ、壁は落され、爐の灰は掻き廻され、戸棚も箪笥も引つくり返して、千兩箱の行方を搜した樣子です。

ジロジロ四方から見て居る不安な眼差の中を、富藏は裏の物置の蔭に案內しました。其處には稻荷の祠があつて、その祠の後ろ——崖へ横に掘つたお狐の穴とも思へるのが、入口を組み

上げた材木と巨大な石が崩れ落ちて、若い男を一人、蟲のやうに押し潰して居るではありませんか。

出入りの者や、番頭手代達の手で、崩れた材木と石を一應取片付け、死體を引出して筵をかけたばかりのところ。

「これだ」

富藏はそれを指して、酢つぱい顏をするのです。

「此穴の中に金があると思つたんだね」

平次は眞つ暗な穴を覗きました。

「狐の穴の中に千兩箱を隱すのは思ひつきさ。盜る氣で入つた者が材木と石に押し潰されたんだからこいつは天罰とでも思はなきやなるまい」

と富藏。

「天罰にしちや手嚴しいね」

「天罰でなきや、下手人はお狐か、死んだ先代の主人だ。錢形の親分が夫婦づれで來ても、こいつは縛れつこはねエ」

市ヶ谷の富藏は少し皮肉な調子で、ニヤリと平次を見るのです。

「成程、金を穴の中に隱して、入口へ危い仕掛をして置くのは、ありさうな事だが、——本當に中に金があるのかな」

平次は崩れた入口から、中腰になつて穴の中へ入つて行くのです。

「親分、危ないぢやありませんか」

ガラツ八は後ろからその袂を押へました。

「狐が噛み付くとでも思ふのかい」

「狐は心配ないが、また崩れたら何うするんです」

「一度崩れたんだもの、もう大丈夫さ。仕掛は種切れだよ。そんな心配するより蝋燭を持つて來てくれ。提灯には及ばねエよ、中は狭い上に淺い様子だ」

平次はそんな事を言ひ乍ら、恐ろしく念入りに穴の入口を調べ始めました。

「ヘエ、親分蝋燭」

裸蝋燭を二本、灯をつけたまゝ持つて來たのを受取つて、平次はもう一度穴の中へ潜りましたが、やがて尻の方から出て來たのを見ると、失望の色が蔽ふべくもありません。

「どうした、錢形の」

富藏もキナ臭い鼻を持出しました。

「千兩箱は愚か、ろくなお賽錢もないよ」

平次は泥だらけになつた着物を拂ひ乍ら、苦笑ひをしてをります。

「それぢや、親分」

ガラツ八もなにかつまゝれたやうな心持でした。

「中は恐ろしく狭い上に、苔で一パイさ、千兩箱なんか隱せる場所ぢやねエ。それに、穴守のお狐もさう言つて居たよ。生れてまだ千兩箱と鼠の天プラにはお目に掛つたことはないつてね」

「親分？」

「解つたよ八。お前は、金を隱してゐない場所に、危ない仕掛をしたのがをかしいつて言ふつもりだらう。その通りさ、この穴の中に千兩箱が一束もあつた日にや、物事が素直に運び過ぎるよ」

平次はそんな無駄を言ひ乍らも、忙しく其邊を搜し廻つて居りました。

三

「市ヶ谷の兄哥、この仕掛は古いものぢやないぜ」

平次は落散る材木や、それを釣つた繩切等を丁寧に調べました。

「どうせ新しいものに決つて居るだらうよ。東照權現樣江戸御入府前からあるわけはねエ」

富藏は一向氣の乘らない樣子です。

「それにしても新らし過ぎるよ。——死んだ主人の音次郎は三月前から寢て居たつて言ふが、この仕掛を拵へたのは、どんなに間違つても、十日より前ぢやねエ」

「？」

「この仕掛をしてから雨が一度も降らなかつた。その證據は繩が眞新らしくつて、石も木も上から流れて來る泥を受けた樣子はねエ」

平次の言葉の意味の恐ろしさが解ると、皆んな默り込んでしまひました。三日前から寢て居た主人の作つたものでないとすると、この仕掛の意味は非常に深刻なものになります。

「それに、重三郎が穴へ入るつもりで、中腰になつて、狹い入口を半分ほど入つた時、綱か何にか引いて、仕掛の石と材木を落したんだ。こんな器用なことは、狐や亡者に出來ることぢやねエ」

錢形平次の論告は、何の憚るところもなく、誰の抗辯も許さずに、遠慮なく皆んなの耳に入つて行くのです。

「で、何うしようと言ふのだ、錢形の」

富藏は少し我を折りました。

「一と通り皆んなに逢つて見よう。千兩箱が出るか、下手人が出るか、それからだ」

平次は自分へ言ひ聽かせるやうに、斯う言つたきり、默つて眼でガラツ八に指圖をします。

「此處へ呼んで來ませうか」

「うん、屍體の前が宜からう。一人づつ呼んで來るが宜い」

「ヘエ――」

ガラツ八は飛んで行つたと思ふと、第一番に先づ大番頭の和七を、襟髪を掴まないばかりに

引つ立てて來ました。

「親分さん方、御苦勞樣でございます」

物馴れた五十前後の男、彈力も圭角も失つてしまつた、忍從そのもののやうな典型的な番頭です。

「番頭さんかい、——お前さんが店の支配をしてゐるなら、主人が金を何處へ隱して置くか見當くらゐは付いて居るだらう」

平次はいきなり突つ込んで行きました。

「ヘエー、それが、その、私の口からは申上げにくいことで御座いますが、一風變つた御主人で、その日の勘定から、帳尻は私にさせますが、纏まつた現金は、何處へやりますことやら、ツヒぞ見たことも御座いません」

そんな事があり得るだらうか、と言つたやうな平次の顏を見乍ら和七は一生懸命辯解に努めるのです。

「それで商賣の方はうまく行つてゐるんだね」

「ヘエ、それはもう」

「お前さんはこの店に幾年居るんだ」

「足掛け三年になりますが——」

「それで支配人といふわけか、前の大番頭はどうしたんだ」

「不都合なことがあつて、身を退いたさうで御座います。尤もその方は二年くらゐしか居なかつたやうで」

「此家は番頭が長く勤まらないのだね」

平次は妙なところに氣が付きました。

「そんな事も御座いません。現に仙之助などは、七年も勤めて居るさうで――」

「大番頭だけ居るんだね」

「――」

和七は氣拙さうに默り込んでしまひます。

「ところで、上總屋の身上はどれほどあるだらう。支配人のお前に見當が付かないことはあるまいが――」

「それが、その、――地所と貸金では差引勘定借りの方が多くなります。世間の評判通り、何萬兩といふ金を隱してあれば別ですが」

世間の噂では――上總屋の土藏の中は小判が一パイ。それを泥棒に狙はせないために、入口の方へは何千貫とも知れぬ青錢と鐚錢とを入れて置くとか、土藏三戸前の繩張りの内側は、悉く金藏になつて居て、何萬兩とも知れぬ大判小判が入つて居ると言はれて居りますが、三つの土藏は主人が死ぬと同時に、たつた一人殘された娘お染の前も憚らず、親類と雇人が集つて、滅茶々々にかき廻され、床も天井も腰張りも、無殘に引き剥がされてしまひましたが、大判小

判は愚か、鐚錢一枚も出ては來なかつたのです。

四

次に引張り出されたのは、死んだ主人音次郎の弟で、居候並に扱はれてゐる音松といふ中老人でした。若い時はいくらか樣子がよかつたらしく、放埒に身を持崩した末五十過ぎてから兄の家に轉げ込み、障子も張れば便所の掃除もすると言つた、恐ろしく氣の輕い男で、鼻唄交りにその日〳〵を暮してゐる札付の放浪者でした。

「兄は何萬といふ金を溜め込んでゐるに違ひありませんよ。公儀御用を承はつて日光山の御修覆まで引受けたこともある男ですもの」

「それを何處に隱してあるんだ」

平次は少し焦れ込みました。このニヒリストは、話し相手を焦らすのを、話術の玄妙と心得て居る質の男です。

「隱した場所が判つて居れば、今頃まで放つて置くものですか。あの支配人の和七が一番先に取込みますよ。尤も私だつて負けちや居ませんがね、へつ〳〵」

斯う言つた調子の男は、平次の忍耐力でも長くは附き合ひきれません。

三番目に姪のお今、——姪と言つても恐ろしく遠い姪で、親類書に載る顏ではありません。

「お前の知つてるだけの事を話してくれ」

平次はこの賢こくないらしい娘からは、あまり大したことは期待しませんでした。二十三にもなるでせう。丸ぽちやの可愛らしい娘ですが、笑つても、物を言つても、無智な愛嬌がこぼれさうで、これも附き合ひきれないところがあります。

金があるかないかは素より知らず、此家に來てから五年になるが「ろくなお小遣も貰はなかつた」と少し怨ずる色があります。

番頭の仙之助は二三日前に平次が逢つたばかり、ひどく興奮して居りますが、言ふことはハキハキして、何を措いても死んだ主人の隱した何萬兩の大金を、一番先に手に入れることに骨を折つて居る樣子です。

「親分さん、お願ひでございます。金が出て來なかつた日には、この家は立つて行きません」

半ば絶望し乍らも、平次の叡智に縋り付かうとしてゐるのが、痛々しいほどよく解ります。

「お前は、お染さんと何にか約束でもあるのかい」

平次は思ひも寄らぬことをズバリと言ひました。

「飛んでもない、親分」

愕然として擧げた仙之助の顏は、まだ去りもやらず、其場の樣子を見て居るお今の顏とハタと逢つたのです。

「大層肩を入れるやうだが」

「お嬢様には、お武家方から養子が來ることに話が纏まつて居りますが、金の隠した場所が解らないと、その話の進めやうがなくなります」
「それはお染も承知か」
「ヘエ――」
仙之助の一生懸命さには、何にか仔細がありさうですが、それは平次の慧眼にも容易に解りません。
最後に呼出されたのは娘のお染でした。
「お前はお染さんかい」
物置の前、重三郎の死骸の側へ呼出すにしては、これはあまりに痛々しい姿でした。精々十八九にしか見えない若々しさも、生得の麗質が年齢を刻む由もないほど玲瓏として居るためでせう。
「美しい」といつたやうな、通り一ぺんの言葉で、これは形容される娘ではありません。人によつては此病的にさへ見えるなよやかさを、醜いと見るかもしれませんが、人間の血肉を盛つた存在で、こんな不思議な魅力を持つたのを、平次はまだ見たこともないやうな氣がするのです。
「お嬢さん、私の訊くことに、包み隠さず應へて下さいよ」
「ハイ」

お染は素直にうなづきました。さう言はなくたつて此娘に嘘も掛引もあらうとは、平次も最初から思つても見なかつたのでした。

「亡くなつた父さんが、何處へ金を隠したか、お前さんなら見當くらゐは付く筈だと思ふが――」

「私は、あの、そんなお金は、出て來ない方が宜いと思ひます」

お染は少し涙含んで居りました。奉公人や親類方が、隠された金を探し廻つて、氣違ひ染みた打ちこはしを初めるのを、お染はどんなに苦々しい心持で見てゐたことでせう。

「すると、お氣の毒だが上總屋の身上は持たないさうですよ」

「それでも構ひません」

「お嬢さんは、お武家方から來るといふ、養子が嫌なのですね」

「――」

お染は默つてしまひました。

「死んだ重三郎は、店の者の受けはどうでした」

「さア、私には」

お染は内氣らしく尻ごみをします。

「お嬢さんは仙之助をどう思ひます」

默つて顔を染めた娘の顔から平次は何も彼も見抜いた様子です。

五

「さア解らねエ――親分、これは一體何處に眼鼻があるんでせう」

ガラツ八は四方構はず張り上げました。

「何萬兩かの金は何處かに隱されて居るのさ。それを皆んなで、一生懸命捜し廻つて居るんだ。命がけの寶探しだよ」

「ヘエ――」

「殺された重三郎の身體を見よう」

平次はガラツ八と富藏を促して重三郎の死骸から筵を剥ぎました。

「おや？」

ガラツ八はギヨツとした樣子で重三郎の傷を眺めて居ります。

「氣が付いたか、八」

「こいつは、上から落ちた材木や石に打たれて死んだんぢやありませんね」

「その通りさ。材木や石に打たれて死んだ樣に見せかけて居るが、重三郎の頭を打つたのは、極く小さい石だ。――人間を丸ごと押し潰すやうな材木や石ぢやないよ。第一そんな重いものを穴の上へ持上げるのは、一人や二人の力では出來ない。それに、あの仕掛はツイ五日か三日

前に挿へたものだ」

平次の言葉は至つて印象的ですが、恐ろしい疑問を次から次へと投げかけて行きます。

「？」

「重三郎は寶捜しのつもりで穴へ入つて行つた。——穴は狭くて身體を返すわけには行かないから、出る時は尻から出て來た。——大骨折で首を出した時、誰か穴の外に待ち構へて居て、手頃の石で頭を打ち割つたのさ。上から落ちた石が、あんなに都合よく頭の上へ來るものか」

「すると？」

「企みは思つたより深い。重三郎の懐中や袖の中をもう少し念入りに捜して見るが宜い」

平次とガラツ八は氣の進まないらしい富藏に手傳はせて、死骸の身體を念入りに調べて行きました。

「こんなものが袂の中にありましたよ、親分」

「何んだ、大福帳の端つこを鋏で切つたのぢやないか、——いなりのうしろ、あなのなか——と書いてあるのか、これは誰の字だ」

平次はまだ其邊にうろ〳〵してゐる大番頭の和七を呼びました。

「——」

「——」

和七の表情は急に硬ばります。

「この右下がりの筆癖は、お前に解らない筈はあるまい」
「亡くなった主人の字にも似て居りますが――」
「まだ外にこんな字を書く者があるだらう」
「ヘエ――」
「誰だ」
平次の問ひは假借しませんでした。
「仙之助が主人を眞似て、右の肩下がりの字を書きます」
和七はさう言ふのが精一杯でした。
「親分」
ガラツ八と富藏は顏を見合せました。合圖一つで、飛出して仙之助を縛り兼ねまじき氣色です。平次は併し、それを眼で押へて、それ以上追及しさうもありません。
その日の調べは、それで了りました。寶探しの深刻な競爭は、まだ續いて居る樣子ですが、平次はそんなものには眼もくれず、和七にいろ〳〵の帳面を出させて解らない乍らも一應眼を通し、それから大きな取引先を二三軒訪ねて、上總屋の財政狀態を、出來るだけ調べました。
それから三日目。
「親分、大變ですぜ」
上總屋を見張らせて居たガラツ八が、少し取りのぼせた形で飛び込んで來ました。

「何をあわててゐるんだ、八」
「音松が昨夜から歸りませんよ」
「音松？」
「死んだ主人の弟で、あの野幇間（のだいこ）見たいな野郎ですよ」
「何處へ行つたんだ」
「町内の湯へ行くつて出たつきりですつて」
「それは變だね、行つて見ようか」
平次とガラツ八は時を移さず飛びました。飯田町の上總屋（かづさや）へ行つて見ると、音松の行方不明などは忘れたやうに、奉公人も親類も、相變らず寶捜しに夢中です。
「音松さんが、昨夜から歸らないさうぢやないか」
「ヘエー、そんな事は滅多にありませんが、また昔の病ひが出たのかも解りませんよ」
番頭の和七は心得顏でした。放埒者（はうらつもの）で鳴らした音松の惡名は、和七も悉（こと）く承知だつたのです。
「どんな樣子で出かけたんだ」
「まだ宵のうちでした、手拭をブラ下げて」
「下駄を穿（は）いてかい」
「草履（ざうり）を穿いて、何んか變な道具を懷ろへ入れて行きましたよ」
小僧の直吉が口を挾みました。

「鍬や鎌ぢやあるまいな」

と平次。

「そんな大きなものぢやありません」

「道具箱を見てくれ、何にかなくなつたものがないか」

「――」

和七は默つて物置へ行きましたが、暫らく經つてから、

「大鑿が一挺見えませんよ、親分」

「よし〳〵、そんな事だらうと思つたよ」

平次はいきなり帳場へ行くと、此間見たばかりの大福帳仕入帳などをバラバラ繰つて行きました。

「これだ。八」

指さしたのは、鋏で紙を切取つた跡が二ヶ所。

「そいつは何んです、親分」

八五郎はその意味が呑込めません。

「この近くに上總屋の寮か、隱居所がないか訊いてくれ」

「ヘエ」

八五郎は飛んで行きましたが、奉公人達二三人に逢つて引返すと、

「寮も隠居所もないが、神樂坂裏に久しく明いて居る貸家が一軒あるさうですよ」

こんな事を聽込んで來ました。

「よし、其處へ行かう。小僧を一人借りて來い」

小僧の直吉を先に立てて、平次と八五郎は早速神樂坂に向ひました。

「此處ですよ、親分」

直吉が示したのは町裏の藪の中に置き忘れられたやうな空家が一軒。裏へ廻ると、雨戸は一枚外したまゝ。其處からいきなり飛込んだ八五郎は、

「あツ、大變ツ」

四方構はず聲を張り上げます。

「音松が殺されて居るんだらう。押入か床下へ首を突つ込んで」

平次は靜かに外から應じました。

「どうしてそれを？」

「懷ろの中には、古帳面から切抜いた紙に、右肩下がりの字で、——神樂坂の貸家——とか何んとか書いたのが入つて居る筈さ」

平次の言葉は恐ろしいほど的中しました。

音松は空家の奥の六疊の押入に首を突つ込み、床板を剥したまゝ背中から匕首を突つ立てられてこと切れて居たのです。

「親分、あの押入の床下に、千兩箱がありやしませんか」
「馬鹿ツ、誰がこんなところに千兩箱なんか持込むものか。あれば精々鼠の糞くらゐのものだ。それよりは、音松の身體を搜せ」
「帳面の紙片なんかありやしませんよ」
「曲者は今度は持つて行つたんだ。よし〳〵證據は一つで澤山だ。ところで小僧さん」
「ヘエ――」
不意に平次に聲をかけられて案内の小僧は飛上がる程驚きました。
「驚くことはない、――これだけ教へてくれ。昨夜音松が出た後か先に、飯田町の家を出たのは誰と誰だ」
「皆んな出ましたよ」
直吉の返事は想像を飛離れます。
「皆んなといふと？」
「番頭さんは夕方から日本橋の御親類へ、仙之助さんは音松さんの出た直ぐ後で、矢張り町内の湯へ行つたやうです」
「お嬢さんは？」
「お嬢さんは何處へも出ません」
「お今は？」

「お今さんも家に居りました。ひどく頭痛がするつて、御飯も食べずに、自分の部屋へ入つて休んだやうです」
「それから？」
「それつきりですよ」
「親分、縛つてしまひませうか」
ガラツ八は我慢のならぬ様子でした。
「誰を？」
「仙之助の野郎をですよ」
「もう少し待ちな――今度は仙之助が殺される番だ」
「ヘエ――」
ガラツ八には何が何やら解りません。平次の言葉はあまりにも奇つ怪だつたのです。
「それより、昨夜の和七と仙之助の足取りを調べて來い。時刻を訊き漏しちやならねえよ」
「親分は？」
「俺は上總屋へ行く。音松を刺した匕首が、何處かに隠してある筈だ。捨てるにしちや下手人は悧口過ぎる。それから、和七と仙之助の外に、昨夜そつと脱出した奴があるかも解らない」
平次は直吉と一緒に上總屋へ引返して行きます。

六

平次が上總屋へ歸つて來ると、此方にも大變な騒ぎがありました。

「親分さん、大變ですよ。お染さんが」

お今は持前の愛嬌を何處かへ置き忘れでもしたやうに、アタフタと平次を迎へます。

「何うしたんだ」

「殺されかけたんです」

「えツ」

「朝のおみおつけに何にか入つて居ました。でも、お染さんは食の細い人だから、いくらも喰べなかつたんで助かりました」

平次はその話を半分聽いて、お染の部屋へ飛込みました。町内の本道が、玉子の白味や油を呑ませて大方は吐かせたさうで、今は疲勞のために、うつら〳〵して居ります。

「お、錢形の親分」

本道は坊主頭をふり向けました。

「何んだらう、先生」

「石見銀山かな。——お嬢さんの味噌汁にだけ入つて居たところを見ると、企らんだ仕事だよ、親分」

「誰がその味噌汁を拵へたんだ」

と平次。

「お勝手で、皆んなのと一緒にお鎌が拵へますよ。尤もお染さんは氣分が惡いから、欲しくないつて言ふのを、仙之助さんはそりや親切だから、自分でお膳まで運んで食べさせましたが――」

お今の説明には、何かしら含んだものがあります。

「仙之助は何處に居るんだ」

「市ヶ谷の親分が縛つて行きました」

大番頭の和七はおろ〳〵した顔を出しました。

「たつたそれだけの事でか」

「仙之助の行李の中に、石見銀山の使ひ殘りと、少し血の附いた匕首がありました。ヘエ、今聽くと音松さんが、神樂坂の空家で殺されたさうで、本當に怖ろしいことで御座います」

和七は心なしか、ブルブル顫へて居る樣子です。

「市ヶ谷の親分が仙之助を縛つて行くのも無理はないが、そいつは少し早まつたかもしれないよ。使ひ殘りの毒や、血染の匕首などは行李の中へ入れてしまつて置くものぢやねエ」

「左樣で御座います、親分」

この無能な大番頭からは、平次は何の反應も求められません。

この騒ぎの中へ、八五郎が歸つて來ました。

「親分、二軒共違ひなく行つて居ますよ」

「で？」

「時刻も合つて居るやうです。――尤も、神樂坂へ廻つて、待つてなんか居ずに音松を刺して、直ぐ歸つて來るやうな手順に行けば別だが――」

和七と仙之助は一應不在證明（アリバイ）を持つて居るやうですが、それが完全とは言ひきれません。

「よし〳〵俺には段々解つて來るよ。そこで番頭さん、今晩奉公人も親類の方も、皆んな集まつて貰つて下さい。あつしから話し度いことがあるから」

「ヘエー」

「八は番所へ行つて、仙之助を貰つて來てくれ。たつた一と晩のことだから、何とか話がつくだらう。平次が見張つて居て、明日は間違ひなくお返し致しますつて言や宜い」

「ヘエー」

八五郎を出してやると、平次はもう一度念入りに上總屋の外廻りを調べました。

七

その晩、上總屋の奥に集まつたのは、家族、奉公人、近い親類などざつと十七八人。平次は

その緊張した顔を見廻して、靜かに語り出しました。

八疊と六疊を打ち抜いて、燭臺が四つ、平次の前にはお染とお今。その横には和七と仙之助。親類方はその後ろへ、奉公人はその横に並びました。

「さて、皆の衆。こんな事を言ふと驚くかも知れないが、言はなきや何時までも皆んなの迷ひが晴れまい。實は――」

平次は口を切つて、一座を見渡しました。

「――」

緊張しきつた顔と顔、――多分平次の口から、二人まで人を殺した恐ろしい下手人の名を聞けるのかも知れないと思つて居る様子です。

「驚いてはいけない。飯田町の上總屋、――神田から番町へかけても、並ぶ者がないと言はれた大分限の上總屋には、氣の毒なことに一文の金もなかつたのだ」

「――」

水をブツ掛けたやうな恐怖と驚愕、一座は顔を見合せました。

「少くて三萬兩、五萬兩、どうかしたら十萬兩もあるだらうと思はせたのは、上總屋の主人の腕だ。まことは過る年の日光の御修覆で下受請の手違ひから、工事のやり直しをしたために、十萬兩からの出費で、上總屋は一文なしになつてしまつた」

「――」

「商人は信用を落しては一日も立ち行かない。上總屋はその祕密が知れさうになると番頭を代へ、大金を何處かに隱してあると見せかけ、世間にもさう思はせて、苦しい店を今日迄張つて來たのだ。死んだ後でいくら探したところで、十兩と纏まつた金が出て來るわけはない。皆んなも、もう床を剥いだり、壁を崩したりするやうな淺ましい事は止した方が宜い。——この平次が、三日がかりで帳面を調べた上、取引先を一軒々々訊いて廻つたんだから、これは間違ひはない。お氣の毒だが、上總屋に殘るのは、少なからぬ借金だけだ」

恐ろしい失望が、十七八人の顏を暗くしましたが、その間にたつた二人、厄介な因緣から解放されて、ホツとした顏を見合せた者があります。

「お孃樣」

仙之助は和七を隔てて、お染に聲を掛けました。

「私は、私は——」

お染はさすがに『私は嬉しい』とは言ひ兼ねましたが、仙之助を顧みたその明るい表情には、幸福感が溢れて居ります。

「御安心なさいまし、お孃樣。お店は私が宜いやうにいたします。一生懸命になつたなら、昔ほどではなくとも、お孃樣をお困らせするやうなことはないでせう」

上總屋が一文なしと決れば、武家方の養子は破談になるのに決つて居ります。今までお染のために寶探しに熱をあげて居た仙之助は寶がないと決れば、さすがにこみ上げて來る嬉しさを

どうすることも出來なかつたのでせう。

「仙之助はお染と一緒になつて、上總屋の身上を盛り返して行くが宜い。——誰もそれに不服はあるまい」

平次のさう言ふ聲も嬉しさうでした。が、事件がまだ片付いたわけではありません。二人まで大の男を殺した下手人は解つて居なかつたのです。

八

その晩、通り魔のやうな影が一つ、お染の部屋へスルリと滑り込みました。

有明の行燈を吹消して、逆手に持つた匕首が、お染の寢首へ——

「御用だツ」

曲者の匕首を持つた手は無手と掴まれました。逆に捻つて膝の下に敷くと、

「八、灯りだ」

平次の聲です。

「おい」

手燭を持つて、六法を踏むやうに飛んで來たガラツ八。平次の膝の下の曲者の顏を見て、さすがに仰天しました。

「こいつが曲者ですかい、親分」
「見るが宜い。――持前の愛嬌などは何處にもない、夜叉のやうな女ぢやないか――あツ舌を噛み切りやがつた」
平次の膝の下で、殺人鬼のお今は、舌を噛み切つたのです。怨みと憤りに燃える顏は歪んで、キリキリと結んだ唇からは、絲を引いて血が流れます。
× × ×
事件が濟んで了つてから、ガラツ八の燃える好奇心に對して、平次は斯う言ひます。
「重三郎は主人の甥で、音松は主人の弟だ。この二人とお染を殺せば、萬といふ金が遠縁乍ら姪の自分へ入つて來るとお今は考へたのさ。重三郎を殺したのが、力の要る仕事のやうに思はせて、その實非力な仕業と解つて、俺は下手人は女ぢやあるまいかと思つたよ」
「ヘエ――」
「帳面の紙を切つて、重三郎と音松をおびき出したのは、一應仙之助の仕業のやうに見えたが、右肩下がりの字なんか誰でも眞似られるよ。――それから、音松を殺した晩は、頭痛がすると言つて、早くから自分の部屋に籠り、そつと窓から脫け出してゐる」
「なアる――」
「石見銀山と血染の匕首を、仙之助の行李に隱したのは、賢いやうでも女の猿智慧さ。あんな事をしたので、いよ〳〵俺は仙之助が潔白だと思つたよ。お今は自分の思ふ通りにならない仙

之助が憎らしくてならなかつたんだ」

「――」

「上總屋には十兩の金もないとわかると、今度は仙之助と一緒になりさうなお染が憎くなつた。お今は最初此家を乘取つて仙之助と一緒になるつもりだつたかも知れない――兎も角、昨夜はつきりお染と仙之助の氣持が解つて、急にお染を殺す氣になつたのさ。あの愛嬌者のお今の顏が急に怖くなつてお染を睨んで居るのが容易でなかつたので、俺はお染の代りにあの部屋で待つて居る氣になつたのさ」

「ヘエー、驚いたことだね、親分」

「尤も、お今のやうなのばかりぢやない。女の中には、何萬兩の金がないと知れて、反つて喜ぶお染のやうなのもあるよ。仙之助も仕合せ者さ」

「ヘツ」

「妬くな〳〵。そのうちにお前にも、良いのを見付けてやるよ」

平次はさう言つて面白さうに笑ふのです。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物全集第二十巻　狐の嫁入」同光社磯部書房
　1953（昭和28）年11月15日発行
初出：「オール讀物」文藝春秋社
　1940（昭和15）年6月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※題名「銭形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：門田裕志
2016年7月1日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控
十萬兩の行方

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　野村胡堂
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/